九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

二葉亭四迷の現実認識

立川, 昭二郎
広島修道短大助教授

https://doi.org/10.15017/12356

出版情報：語文研究. 6/7, pp.49-55, 1957-12-30. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

二葉亭四迷の現実認識

立川昭二郎

二葉亭四迷に日本における近代文学、写実主義の成立を見ることにおいては、既に相当以前から定説になっている。(註一)しかし、その認め方については様々の立場があって必ずしも一定していない。特に戦後には自由な立場からの評価、批判が可能となり、従って四迷研究も大きな前進と収獲を得たわけであるが、それだけにその認め方も積極的、消極的、肯定的、否定的の色々な立場がありますます複雑なものとなって来ている。私はこの小論において、いくらかでも四迷の本質に迫るために、四迷の現実認識の態度、姿勢についての解明を、「浮雲」と彼の書きのこした感想文などを中心として行って見ようと思う。彼がどのような態度、姿勢で当時の現実を把握したのか、又当時の現実に対して彼がどのような態度、姿勢で立向ったかを明らかにすることは、重要なことであり、それは四迷の評価、批判の問題に密接に関係することである。

まず、四迷の文学への接近と認識の問題である。四迷の文学への接近は、後に藤村や花袋達が示したような意味においては決して積極的ではない。彼が文学青年としてではなく、政治青年としてその青年時代を出発していることは常に指摘されることであり、こうした立場からの外国語学校時代の文学認識が、当時の他の作家達に比較して如何に異っており、かつその上すぐれたものであったかについては、早く中村光夫氏の述べているところである。(註二)がしかし、問題は彼のそうした文学認識の内容である。

…(前略)…それが始めは文学に入らないで、先づ社会主義に入って来た。(中略)で、社会主義といふことは、実社会に対する態度をいふのだが、同時にまた、一方において、人生に対する態度、乃至は人間の運命とか何とか彼とかいふ哲学的趣味も起って来た。が、最初の

頃は純粋に哲学的では無かつた――寧ろ文明批評とでもいふやうなもので、それが一方に在る。そして、現世の組織、制度に対しては社会主義が他方に在る。と、まあ、源は一つだけれども、こんな風に別れて来てゐたんだ。（「予が半生の懺悔」）

今彼の社会主義についてはほとんど問題にする必要はないが、[註三]注意すべきは、「最初の頃は純粋に哲学的ではなかつた」という言葉である。即ち、四迷は政治青年らしく彼がロシア文学を通して学んだものは、「ロシアの文学者が取扱ふ問題、即ち社会現象」[註四]であり、「現世の組織、制度」に対する関心であった。彼が、「作家苦心談」の中で「浮雲」のモティーフについて述べている言葉の中にも同様な関心の示し方を見ることが出来る。

或は彼の中心になッてる思想は、自分が露西亜小説を読んで、露西亜の官吏がひどく嫌ひであッた。其の感情を日本のに応用したのであッたかも知れません。

大切なのは「最初の頃は純粋に哲学的では無かつた」というのは後に「文明批評」「現世の組織、制度」に対する興味の態度が、「純粋に哲学的」なもの――いわば彼の苦悩の仕方が、抽象的、人生派的なものとなったということである。

ヂレンマ！ ヂレンマ！ こいつでまた幾ら苦められたか知れん。これが人生観についての苦悶を呼起した大動機になってるんだ。即ちこんな苦痛の中に住んでゝ、人生はどうなるだらう、人生の目的は何だらうなぞといふ問題に、思想上から自然に走ってゆく。実に苦しい。従ってゆつくりと其問題を研究する餘裕がなく、たゞ断腸の思ばかりしてゐた。腹に拠る所がない、たゞ苦痛を免れん為の人生問題研究であるのだ。だから隙があって道楽に人生を研究するんでなくて、苦悶しながら遣ってゐたんだ。私が盛に哲学書を猟ったのも此時で、基督教を覗き、仏典を調べ、神学までも手を出したのも、また此時だ。（「予が半生の懺悔」）

この文章から推察出来ることは、四迷のこうした苦悩はいたましいほど真摯であるということである。いかに彼が自己に忠実に人生を追求していったかがわかるのである。しかし、彼の苦悶がナイーヴで真摯であればあるだけ、彼の態度は自己の苦悶を客観的、社会的に見て、その意味――自己の苦悶をして苦悶たらしめる客観的な意味を見出す

という態度とは縁遠いものであるということが出来るのではなかろうか。彼の人生追求は、当時の日本の現実、彼をとりまいていた周囲の現実とは、ほとんど無媒介な所で、抽象的、個人的な場で問題にされているのである。こうした彼の苦悩の深まりは、「予が半生の懺悔」によると、「浮雲」製作中のことのようである。とすると、「寧ろ文明、批評、とでもいふやうなもの」とか「現世の、組織、制度に対して……」といった表現のもつ重大な意味そのものが、どれだけはっきりと四迷に意識されていたのか疑問であるといえる。四迷が、ロシア文学から学んだ現実批判の態度、そして文学観が、一体どれだけ四迷の人間形成に影を落しているか、又どれほど日本の現実をすくい上げることが出来たか——彼の現実認識の不透明さが、それだけ「浮雲」の不透明さとなっているようである。(註五)「ベーソンスキーの批評文などを愛読して(註六)「日本文明の裏面を描き出してやらうと云ふ様な意気込み」で書かれた「浮雲」において、作者四迷の現実批判が、時としてするどい批判を持ちながらも、(註七)それが三篇にもなって来ると全く薄弱なものとなっていることは否定出来ない。(註八)

この「日本文明の裏面を描き出してやらう」というすぐれた意図を、不透明、屈折したものとして終らせてしまったもの、「浮雲」の近代性にマイナスの面で働いたものに、こうした彼の現実認識の姿勢以外に、もう一つの姿勢として、四迷の儒教的、志士的、武士道的なストイシズムがある。そして、この四迷の内面はそれをそのような形で存在させた処の当時の日本の現実——自由民権運動や、上からの明治絶対主義政府による近代化と決して無縁ではない。明治十年代の飜訳小説に続く政治小説の時期は、それ等の小説の多くは文学的には未成熟であり、いたずらに架空の物語的要素が強く、人間的な自我はほとんど姿を見せていないのであり、従ってこれ等の小説に活躍する主人公達は単なる傀儡でしかないのである。だから文学的な共鳴を読者に与えようはなかったのであるが、それはそれとして、当時の政治の問題を文学との関連において内省し得なかった程の一般状勢の中においては、一応の歴史的な役割はあったのである。それ故に文学青年以前の当時の有為な政治青年達にとっては、彼等の血を湧かせ肉を躍らせて共鳴させ得るものであったのではなかろうか。即ち、彼等は日本の将来を夢みる若々しい情熱家であり、描き上げるユートピアに自己の情熱を賭けていたのである。そしで之等青年達の情熱を一番深いところで支えていたものは、それは国士的、儒教的、武士道的なストイックなそれであった。四迷もやはりこうした環境の中での自己形成を経験しているのであり、同時にこれは上からの近代化を遂行した

明治政府の官僚、軍人達の支柱でもあった。更に下からの近代化としての自由民権運動の末尾を飾った、例の福島事件、群馬事件、高田事件等に示された政治意識も、それが広汎な一般大衆の政治的情熱として意識されるには、未だ大きな距離があったのである。だから自由民権運動に示された政治的情熱が――それが多分に不純な夾雑物を含んでいたにしろ――消滅し、それがやがて文学的情熱として現実の中に定着し、日本近代化の一翼を担うなどということは相当至難なことであるという、そういった一般状勢であった。それがやがて北村透谷を経て、藤村や花袋の中に開花した時には、その文学的情熱は政治的現実を切り捨てた所で開花したあだ花でしかなく、片端なものであった。四迷の場合はその間にあって、「宗教的傾向、哲学的傾向」(註九)の強い人生追求者であったのである。むしろ彼はこの傾向の上に立って、自然主義作家達の文学的情熱の批判者ですらあった。(註一〇)それはそれとして、四迷の儒教的、武士道的気質は前述したような一般状勢の中で理解さるべきであろう。

私がずつと子供の時分からもつてゐた思想の傾向――維新の志士肌ともいふべき傾向が、頭を擡げ出して来て、即ち、慷慨愛国といふやうな輿論と、私のそんな思想とがぶつかり合つて……。「予が半生の懺悔」

という言葉の中に、当時彼が置かれていた場を明瞭に読みとることが出来る。又四迷は同じ「予が半生の懺悔」の中で、「私は当時『正直』の二字を理想として、俯仰天地に愧ぢざる生活をしたいといふ考へを有つてゐた。」と云い、この「正直」なる思想は外ならぬ儒教の感化であるとも述べている。このような立場に立っての現実認識が、当時の日本のおかれた複雑な現実の実体を積極的に把握することが出来ないのは当然であろう。だから、

模擬したって到底だめだ。モーパッサンが深刻だと言つて真似て見たって然うはゆかない、ツルゲネフ、トルストイを真似たって矢張だめだ。それは国民性に無い事だ。それを無暗に大騒ぎをして彼方のを模擬するは愚かな話だ。それよりも日本人は国民性の特色を発揮して、別に一生面を開いて行つた方がいいぢやないか。実感の上から日本人の事を考へて来れば凭う思はねばならない。即ち動的の長所によつて文芸の上にも新らしい方面が開けてゆくべきものではないか。これが日本文芸の真正の進路ではないか。「文壇を警醒す」

というような当時の似非近代化に容易にまき込まれやすい場での発言も、なんの抵抗感もなく出て来るということになるのだ。こうした限りにおいて彼は典型的な明治の教養人の一人であり、彼の少年時代から血液の中に流れている、武士的、儒教的倫理観はたやすく清算し得るものでもない。

旧思想の根柢は中々深いものですからね、新思想がこれに調和した上でなくては迚も勢力はなからうと思ひます。新思想の中でも文蔵のやうなのは進んでゐるには相違ありません、が矢張多数であッて、而も現時の日本に立つて成功もし、勢もあるのは、昇一流の人物だらうと考へたのですよ……

（「作家苦心談」）

という彼の内情は、「浮雲」の人物は文三も昇もお勢もみな自分から出た人間だ、と横山源之助に四迷が語ったという言葉と考え合せた場合、作者四迷自身の中に昇を強く否定してしまう内面の強さを持っていなかったことを我々に示すものではないだろうか。文三が、インテリ小市民の直面している現実の意味の重大さを、歴史的、社会的に追求し見究めることが出来なかったのも、こうした内面の弱さがあったからではなかろうか。文三の昇の官僚主義に対する抵抗も、「今更手を杖いて一着を輸する事は、文三には死しても出来ぬ。」というような古風な意地で行われているのである。「浮雲」に一貫したテーマがあるとすれば、文三に与えられている「正直」という思想であり、その「正直」という「理想」は外ならぬ「儒教」によって養われたものであった。一つの抽象的な「タイプ」である文三に四迷は「正直」という「理想」を与え、その文三が現実の中で生きてゆきながら――昇やお政やお勢や母との交渉の中で、どのように具体的な人間性を持ち得るかというのが、この「浮雲」であろう。とすれば、こうした「正直」を「理想」とする文三が、いかに人間的に成長していったとしても、それは客観的な積極的認識に到達することは出来ず、文三の現実――昇やお政やお勢や母――との交渉が、文三の心理的な個人の内部に沈潜して行き、そこから抜け出すことが出来ず、遂には敗北に終るということになるのも当然のことではないだろうか。

又四迷が一生持ち続けた懐疑や苦悩は、それが観念の場で行われる限りにおいて、もともと解決出来そうにもない程原理的、根本的なものであったことは、彼の書きのこしたもの――「私は懐疑派だ」、「予が半生の懺悔」「雑談」等を読めば充分に読取ることが出来る。彼の苦悶は何よりも現実との具体的な接触の場で解決されねばならなか

ったものである。

かくして四迷はロシア文学から折角現実批判の眼を学びながら、日本の現実を底からすくい上げることが出来ず、「日本文明の裏面を描き出してやらう」という正しい意図を示しながらも、「浮雲」は「文三の個人的な内部」[註七]に沈潜してしまった。四迷が「作家苦心談」の中で述べている、「『浮雲』には一貫してゐる思想といふ程のものはありません。」とか、「新旧両思想の衝突といふことも、ガンチャロッフが名著『頽れ岸』の中に、よくかいてあるのを見て、日本へ応用して見たのです。『浮雲』はすつかり真似たものですよ。」という言葉は、そのまま「正直」な告白ではないだろうか。「浮雲」は四迷が当時の日本の現実批判の中から必然的なモーメントをさぐり当てて製作したものではなく、ロシア文学の単に偶然的、個人的な移植であるということが言えるのではないだろうか。とすれば、「浮雲」の近代性は、四迷の現実認識に求められるよりも、むしろかえってその現実認識を、そのようにあらしめた所の人生派的な姿勢――異常な真摯さで人生追求を行ったそのナイーヴな、無類な自己への誠実さの中に、求められるべきであるように思われる。

このことについては又他日を期したいと思う。

註一　四迷の研究が本格的になった二葉亭四迷全集の第二回の発刊（昭和十二年、全八巻、岩波書店）の頃、即ち、中村光夫氏の批評頃。

註二　昭和十一年「二葉亭四迷論」河出文庫「二葉亭四迷」所収の「生涯と芸術」の P46～P50。

註三　「予が半生の懺悔」の中で次のように述べている。「勿論、社会主義といったところで、当時は大真面目であつたのだが、今考へると、頗る幼稚なものだつたのだ。例へば、政府の施政が気に喰はなんだり、親達の干渉をうるさがつたり、無暗に自由々々と絶叫したり――まァすべての調子がこんな風であつたから……」。

註四　「予が半生の懺悔」。

註五　右と同じ。

註六　右と同じ。

註七　「浮雲」「第二回風変りな恋の初峯入・上」の中で、文三が始めて某省に就職した時の感慨を「ア、曽て身の油に根気の心を浸し、眠い眼を睡ずして得た学力を、斯様な果敢ない馬鹿気た事に使ふのかと思へば悲しく情なく…」。というようにもらし、又、「第九回すわらぬ肚」の中で、昇の官僚主義を「蟻とも蝶とも糞中の蛆とも云ひやうのない人非人、利の為めにならば人糞をさへ嘗めかねぬ廉恥知らず」と批判している。等その他二、三指摘することが出来る。

註八　一、二篇での四迷の人間造型の意慾は旺盛であり、文三、

昇、お政、お勢等夫々の会話を通して「タイプ」は客観的にヴイヴイットに描かれて、官尊民卑、官僚制度への批判も不充分ながらなされているのであるが、三篇になるとこれ等は全く文三個人の心理の中に沈んでしまう。又二篇にはお勢の競争相手としての課長の妹や、文三の故郷の親戚の娘などが現れて来るのであるが、之等の人物は三篇が中途で放棄されるまで、筋の発展の上に重要な役割を振当てられるべきであるにも拘らず、殆んど登場して来ず、シチュエーションの上にも破綻が来ている。

註九　「予が半生の懺悔」。

註一〇　四迷は「私は懐疑派だ」の中で、自然主義作家達を次のように批判している。「今の文学者など殊に西洋の影響を受けて、いきなり文学は有難いものとして担ぎ廻って居る。これぢや未だ〳〵途中だ。何にしても、文学を尊ぶ気風を一旦壊して見るんだね。すると其敗滅の上に築かれて来る文学に対する態度は「文学も悪くはないな！』ぐらゐな処になる。…」

註一一　「私がずつと子供の時分からもつてゐた思想の傾向――維新の志士肌ともいふべき傾向」という「予が半生の懺悔」の中の言葉は既に引用しているが、稲垣達郎氏の「文学革命と二葉亭四迷」（岩波講座「文学」4所収）によると、四迷は、かぞえ年十二才から十五才の感じやすい時期に、松江の市村友輔の相長舎で、「五経」「十八史略」「文章軌範」「日本政記」などの素読や「古文真宝」「左氏伝」「新論」や「弘道館述義」などを聴講している。

註一二　「二葉亭四迷全集」昭和二十八年岩波書店「二葉亭突内」の中の中村光夫氏の「生涯と作品」。

註一三　「第十一回取付く島」の中。

註一四　「予が半生の懺悔」に次のように述べている。「『浮雲』にはモデルがあつたかといふのか？　それは無いぢやないが、モデルはほんの参考で、引写しにはせん。いきなりモデルを見附けてこいつは面白いといふやうなのでは勿論無い。さうぢやなくて、自分の頭に、当時の日本の青年男女の傾向をぼんやりと抽象的に有つてゐて、それを具体化して行くには、どういふ風の形を取つたらよからうか。といろ〳〵工夫をする場合に、誰か餘所で会つた人とか、自分の豫て知つてる者とかの中で、稍々自分の有つてる抽象的観念に脈の通ふやうな人があるものだ。するとその人を先づ土台にしてタイプに仕上げる。」

註一五　稲垣達郎氏は「文学革命と二葉亭四迷」の中で、文三の「複雑な破滅型の人間はよく造型されていながら、かれを通して、かれを複雑にし、破滅にみちびく諸条件――とりわけ官僚機構などへの批判をきびしくするためのものにしては、文三の個人的な内部へ沈みすぎるところがあつた」ことを指摘して、やはり現実把握の不徹底さをついている。

註一六　「雑談」の中の一例をあげると次の如きものである。

「天性深く物に感ずる方であるから、随つて深く考へ入る（中略）深く考へれば考へるほど分らなくなる。人は何の為に此世へ生れたものか、人生の意味は如何であるか、これさへ分れば如何なる苦辛にも耐へようと思ふが。」（傍点筆者）

註一七　註15・参照。